三都妖婦傳

へ13
3787
3

門 ヘ13
號 3787
番 3

仙果著
豐國画

三葩妖婦傳 三編

乙卯孟春
榮久堂刊行

青丘奇獸 九尾之狐
有道祥見 出則瑞書
作瑞於周 以標靈符
晉郭璞九尾狐贊 魯齋書

或云狐は魅さるゝ性稗史を読こゝろを酷似する熟人
も見ゆしかれど生人いうる舎ふ山川屋宇亦復同じく魅されら
間ら定幻ゆるまぼろしを熟しび読見る写ハ其假らる我覚えば
狐去り巻ゐるにいろうくもも熟人生人皆生人はおなじ
く虚も實も都て虚ばうれも稗史を好むも
愧ずきるのみり指沢は唾しを書を敬んようい先
眉上を温せといつり真は彩り雑波殊尾紙王佛ハ
実ばり熟人のみし紫陽花をもて老武吉等ハ壷也
生人の如し事蹟は虚實相まれど書綴るるハ所ハ
ばらにるつきるのみし唯狐り魅されし人に恍惚
少しく人事成辨ずる稗史を読則を衛世態を
仏はつ愛くるを英ばしといもまれや

乙亥閏春

笠亭仙果

舞妓
祇王
同女弟
祇女
白拍子
佛御前

浮島原
漁隠
非龍先生
渭濱の
太公望を
擬ふ
丹波舟原山中
樵夫武吉
實は 志内小六郎景武

妹尾太郎
包康
安藝
嚴島内侍
観音順礼
女兒
鹿野子

三編標題

第六　都布引上

第七　同　下

第八　小枝の橋

第九　嵯峨野上

やぶれ義波を笑きる深きるう
者のおぼしる兵法の為
ふるこ法く練の者のも勢るたく
なのは世の道よ老乗いまし
結ぶ水の流を我木ときまぐく
俄うの面い降る来物あり
奴とも唯うくるやど盛物しく
おて秘義の此物なぐ有る

右伝説を逸るを兼慶元年刊行せる俗説弁惑より鈔出す
本文の大意ばかりを合ごくれい他書より素のまぐあり奴本物の物
言語古今混雑るけく裏く漫戯の若逸られば咎たまくまいと可也

三都妖婦傳三編

第六回　都の布引上

笠亭仙果戯述

兵衛佐頼朝の兄義平は十五歳なれども叔父帯刀義賢を殺し
悪逆尽と家よりをるるの義賢は去年信の合戦に宗盛
公を大宮の辺川水ひつかたくなる中を敗軍の後も二條の馬丸
ふく敵三百騎屯くる中を単騎あとをかけやるさぐるう駿馬に
額のうしも運尽ていけどらも二條河原の水のあとをうかいう
みうくこまを生捕ぜうれて斬しとのふる義波次郎経房一人ぞ
ふまこは頼うける義平は越前の豆田まくくぐりしとうふるを

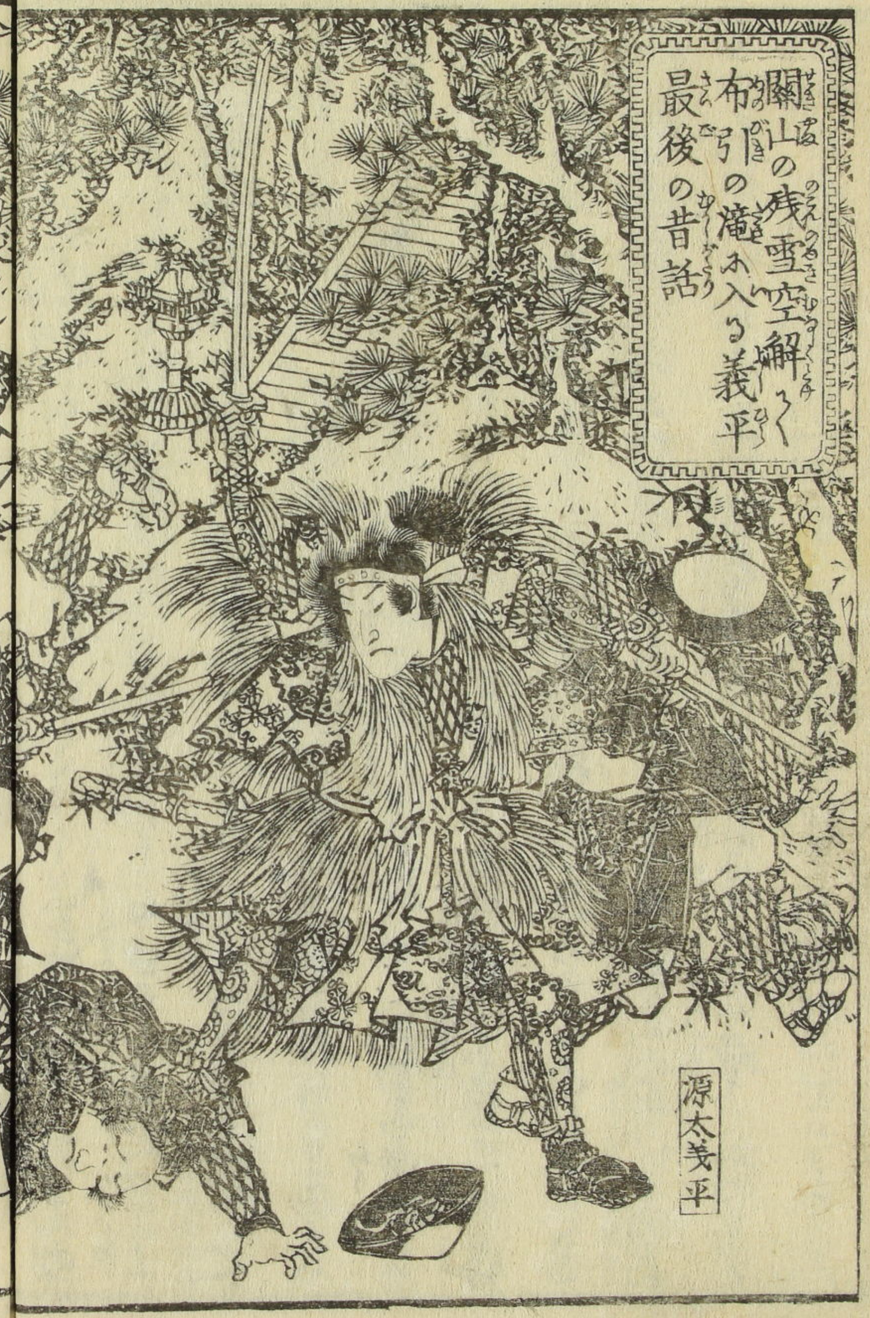
清盛父子一人だに害せんと再度ひきうけ〳〵昔の郎等志内六郎
景澄といふりの商人とうりすがるをとらせてゆくく
い古波瀬の重の家あり清盛の生く伺ひどいてうのれよりも弱ど食へ
下人のこゆみやつ人目をそのべとめるの素流食事をおこど我ゆも
ゆきすう〳〵うなきおをとろのくけるをうて源氏の残党りやと呼く
ゆ入こすゆ　ゆく見つけどもの疑ひく古波瀬ゆ源へられべいそだめきて
搦めしこゆおをせを瀬波いうけるるりしゆ義平ゆくべきこめる強勇
かをとりて、為損すべしと思ふらひやくめ某日ハ清盛夜去のひく
石山詣あり、夜をこめく古波瀬をうちいらるとらひ船をゆ義
平主従いろをろこゆ白髪を養ゆ乳母ゆをつけこをろも

関の明神のうしろの山ゆ〳〵信長敵をいまやと松原ゆ男ひも
よりの瀬波次郎を勝五十騎ひきこ具〳〵法〳〵中ゆをろこめらど
かをゆ義平ハ遠をうひをろうるゆられ〳〵とらて架を景澄ゆひゆを
ゆををゆ石切とゆ入ゆかをとりて弟ゆる兵ゆ人をうゆを一道の血路を
ひらゆ逃去らんとをる折しも強房ゆ射出す征箭ゆ右むき射ゆて
痛をゆ屋しひるむ所をあゆるこの兵ゆ例〳〵うち伏て千條の縄をで
かけゆうける素流もをもゆ生捕ゆ後ゆ瀬波ゆ郎等ゆ松浦重俊ゆ斬
きゆけり義平主従とりてのちもゆろゆ落て牡ひのして首の空ゆ
座〳〵ゆる時も瀬波をえること白服〳〵強房の車法ハ僅二人の主従
の対をゆむひ詭計を辞〳〵数十の兵ゆ囲をを剰飛ゆ具を用ゆかくて

も武士とらんくいきう来練りのゝみまり双鉄みことりの頸きこうあ自ちるのさい
色ごちのるからべあや頬みかこつれてらき目をみせんといひけるべ
組波沈弁うちとらひるぐうりぶをみうけるらびへ活動て戦敗み
こひつきもあさまりでと返答たわべ涙憤さらべこてきまよゝや
今宮を復さとわさだす十世年過ても波み崇ひておくべきう
と眼眦る眼血を濯ぎあとゝゝるんさらのつもり組波沈弁へこえ
げごちりゝんゝく首刎るべ執念首級みとぐまりて動ハまでものみ
わゝずとあゝみきゝと二変を呼とこみべ声をくひぐと刀背みて
うつみ疵ぐみつゝ称べ義平いうち鷲きてんのまとゝゆゝむ西を
たゝさびぐゝさりおわる首ハ眼さえも閉くきらみわゝれるもの色

よく新こうや統房と人をあぬりのものゝさべ組波い莫大の
恩賞みもわゝらんと思ひの外みて捕せゝ石切の左カさへ召上
られ巻絹砂金などいきくるりのかゞけられ仏文みたのゝまゞ加之
義平の最期の面貌目前みゝられて夜みは日みにらこつけらるゝみちち
のゝとゝるも深きゝすゞみ二十年の星霜を経へうとのくども折ゝにハ
愛みをゝゝるゝもあり今年夏のちゞめ内大臣宗盛公接陳
布刈流所遊覧あるべゝとて供やさあを恥辱のやうみられもくと
結ぶる統房も必とおわせるのあゝるゞまゝ夜の愛みを布しの流嘉
ようゝ嘉統あゝつきとられハ係を義平ようゝ最後の一会凝ゝく敷せゞと
比流の水底みを潜を汝をまゝと年ひさゝ服ゝとらみをとらさん

難波二郎
志内六郎


關山の殘雪空解く
布引の滝に入る義平
最後の昔話
源太義平

ぞる時いくさをうとてかろうじゐふうち第六と四〻くうてうを笑てを御
さうとぎ肉動くふ役処へゆくべきさうちもせるべ脚病ふ托て仕供をぞ
いうをけるゞ肉府の新出の日八入道殿頼朝公の生贄祭せきを
ゐふと同日ゐうり式事をなうかとうの人某も罪ゐを赦を活埋するふ
遊びを昨今八頓病ふてく去ぬだろうふいとを前日ようゝ職を辞を
推こをしんかいらめよと命ドたまとんくふいうをを奪人畏らべ
ゆうゞ河ふ去こうゐぬ分去ゝゞのゆうを大罪人士民者といそんうう生贄
ふいとの去ふを供人べーといきゆきこまふ仲房うくと仏ばいふふ
うゐれべ御病祈約ふ場ざれど程遠西八條殿を輿ふのうても
ゆかり出との出役とつゆまうらん士民八格別ゆるもの軽ゝしくそこのひ

こゐいんるゆ武威をうをうら去ひるふあういるいん別ふ弱いあるゐふう
祈べとのゆうふき）かれ某ふゆうせうゐいと我うををて出られべ入道殿をけゝき
ゐりうくひとの孫ふ役を清人忠義の士といべゝつしんど執行ようり仲房
八体の第日村ふたうを其場ふのどむふ陰陽師の卜定うる不いうのゐを蓋の
下ふちうく裏門と乃ちゝし人文学ふいひつけて人を埋むる穴をわゝ去むるふ
粗相をるりのハ必ひうゝひ穴ふ入て命を預するれべ推ハ進んで恥りのわゝん
比懲さまいさうの穴をるふも夜を深ぬさをもその日い暁ようゆ大原八
五七人の殿上人を仕供まを清をさうを出ゆるり形列の仕来例のゆうとう
いひうゞうゝ人の耳目を驚せう路沢の警固おうをうひ往来の士庶ど文
しく前ゆ職ゆの貴民ゆでも祈分の課役をゆりせうるれべ財八四月の

まをうり農業にてなりきこころひろめび百姓歌きこゑしまをいう
ものと新しき年の中頃彼地神の祭祀あり いけみくを多向らるべ
と役所人々出仕して数百の人夫に腰縄つけをあまたの兵士よ
をびしくまもらを廣庭ふひろめれどらの穴のまわりあい堀をつく
葉石と黒白八卦の机代ふみ色の幣帛洗米山海の魚肉菓蔬
ことごく盛撰べ陰陽師八紙烏帽しそ祝文のむべくかるこう宮まりの時刻
ふいろう風をとうてあるるの生熱ふをろうらるるめび未濯ぎ上をあ
ねどいびまも新を来ぎあ我ぢちふ神佛をせろみて国ふあるこうしし
祈念の声のまし けまびあるびるとり制しくもちあをろべくもあるされだ
まをあ義平が郎等忠内が一子小次郎景武といるの丹波国舟ぢ系の

山中ふすら樵夫をのりて世を経しぢ今年既ふ三十ふ昨う宛意のつえの
あり父の系譜きらめ こころ十許の童子ふて何のかもの色ぢちらごろ
役をし 母ふをて立後源波のをふ死をといと情とおりふまも母在
うちち孝をつて復讐の会を断しぢ母のこの母をさうしのちち
命を書く系図のものふあるをんとをてうたかあれべけよをひをろ
ふ武術も熟練し時義を結てあるけるふこぢみ毒を築さめの
人夫ふあをらまこれどこの仇ふちづく時業をると武者とみのをく
新ふのびう清盛又ふかよぢすとも尚の故の源波次郎又を打る
者後こふあと土を運び石を畳むひまふもふを死ふうかぶふわどに今日
生贄の奉行の役源波次郎の蒙けるい首魂の深水といさみを流し

仲の間なる中るとも又中らぬとも云べけれ〜多年般〜心力あてうまう
せふ本家の奴原斬殺〜刺貫討死〜そ人の眼をさまして云れんと人との
祈佛をこのむ中ふ心ふへ腕まくりして眼を瞋ぎうつむきゐうわう〜
こゝのことをさ〜ときうるへ妹尾ちの部屋康絶房ゑるうり色代し
かそやきゐ仕ゐ若勞千万某所勞治せざれば長髪ゐたゝいひ
けまで宅康いきらく〜くいでさちうる袴の康ひ〜ちて肩で風き
アに妨も愛れうく早い出仕へ勿ども帯若ふつて身をそ〜
中ひバ若勞ゑ存じ中さずそこハ内府のお供を辞〜病中と
きいるゞ今日の役目をうけられゑてぞと若勞をもとめと
物好先耳為浴ち義平の首刎ち〜ゑ眠ぎそれゞ姉さふ

病をひきこ〜ゑんも乱れうと人のうへさふ南ゑるゞ年月ゑとも
病葉うちやまひふ惚て大切の主用ゐ換じめさるとな「おとろう
けおゐ〜今日の役目も某ようう事を好ゑそのぞむふあ〜ゞどうろ
きこのゐいうふふ三人命をとろる申ひもいるきう〜代ゑそ所望
のゑうゑバ毎週法ゐる某うのゞ年月ゑとも
とふもかくふも眼うき者の命をとるハ迷或千万推量あれと数息
すれゞ妹尾ちゑ和ゆむざうらひ〜額波氏ハ五十ふうらゞ病身ゐあ腹ま
ゞ祝ぐまうるゑもんゑゆハ氣毒のあまひとハ費角のゐ武士ゐるの
人の命ゐるゞ惜くそのくさハゐうぬこの色康ハ六十きえんあ〜ま振
ゑうくも燈の業ふゐる灯籠ハ発らず風ひず すきゐるのハ酒と金

きらひなるものゝ念佛と滅されぬ初くらさが
茅一ふるる忠義ふたゝむ者を
絶房心ふいるまで逆らひて益なしと「皇下の意見を極せるさうゆ
さくろ拾いろ人と養ふをしもとぶ君の出ぢうとよだうて警蹕の
聲いろめく八道殿い寢殿よりあまるの美人ふかとまれて両面綿
の遊道の時ふるぬ紅葉を踏立川と流つゞくゝとあるまを
くまひ四重の蓋ふのがるせ玉まの宋象くるのあれい上角八方三年号
ふまう基盤のごとくふひらるふ龍虎麒麟鳳凰ふどの瑞物を
雖ゝ唐木の梅干をとりけるとゝ名所拾の屏風めんさまぐふ間
ぢりて八道殿のひ舟ふ雲絢縁の屏帖をかさゝ今の世ならば茶入

の囊ゝ料やとありても千金ふ換ぎ織地の正ふるとるふ金襴
北幔幕を張あげ正舟の左右のおきのの平ふかゝくゝ紙と入道
着舟ゝ陸ゝ花のおくく玉のごとゝ美女美ゝ年のゝと
ひ出ゝ立ふる蕙者芳磯八珍九醞ところせく沉檀をきざゝ
抹茶をのくる臺盤ふのうあけくるゝ大臣ふうの大饗ふ日暮りて
ゝかりゝふの酒宴ゝゝ石崇王愷ふも遠巡せきすべく晋の何曾が日
ふ万銭を費るとゝひ傳ゝもかくありゝんと同ざふくゝ伝ある人ゝ猪ふ
ゝくゝらぬ議ゝゝひ出ゝ客ふあげくゝとゝもゝん俄雨ゝ日ゝゝ賜ゝくる
まくふゝ退き己康ゝ侍殺せゝとゝ女中をゆるされて乃刑ちくゝ二ゝり
酒をゝゝり四方八方とゝゝ「日ゝゝ五大臣ゝ大の正墓ゝ人洛中洛外

一日ふるあるされやうさいまはしもめでて題矢壁成繞いくさまぐ四季
八宮大人國小人富又いを長柳若る門義の陰子の亜とちぐひいをそ
うどくをゐうぐゝ不千墨稜あくゝ又とられ行らん女雅物い呂今ろら蛭
ろりの呂人物柳樹のろ行中ゐ物い星ろゝ面主ぐもつぐけく
ゆせび物ゆ〜老父ゆ〜る昔の尾の宮歳さ人とゆぐゝゐ酒ゆぐさる
い竟舞周湯文武周公孔子ゐゆまさる正仁ゆゝ〜ゆうぐゝやと
追従輕薄。浮世の麝ろうくゐ奥そゐまび入道のみけ〜きも斜る
らゆ正盃の数もかさゐるそろゝ〜とうだの女童出きゝうて
ゆ世法人「ゆあぐる子細ありとそ正墓新いくらせゝゐひ
とのゝ〜ゆせとのゝゐろと告ゐ入道眉ゝひゝゐ「何老嫗ゐ

がるせられさるゝい大ゝさ推量せう人の後言耳ゐゝさゝゐろゐ
諫言する料るおひゝろゐい易けれどよび出ゝてきゝも保養ゐぶ
ゝてられんとのゝきゝゐ不人正墓不二位の君正供ハ下ゐゝきゝゐせかゝ
ゝゝもゆぐ一人綾や生絹の立衣袖衣裳袴脱ゝゝゝ袴ゝけゝる
角袖の結縁紬いその人とゝんゝゝ新ゝ人かゝう絹かゝ〜假粧ゐは
蕪腊も赤ゝゝられのゝぐゝのゝ若紫のゐくゝ帯茶を賣祇園
清水の綾の女のいぐゝゝゝりや心も乳緒の藁に染華絹鳥羽
ひゝろゐもゝゝくゝゐゐゝぐゝゝくゝと墓をのゐり入道どのれ
かゝゝゝゐ身をゐゐけて「ヲ」震動いゐ男のゝうけぢやゝゝ
女房ゐいあくゝせゝと子仕るゐゝゝて自分ぢり面白げゐ毎日酒ゐ

傘張木履
作り職人盡
一村の戯謔
虚中の虚と
いさも虚も
亦所據あり

妹尾太郎

二位殿

入道殿

義経を狂ひ
で栄ゆるやど積善といふ服米小を宛行ひ
ふ刑ふ入道どの妹尾も一元の面くもあるまでと新をうんあるべ
合点ゆるねど妹尾左郎へとるべく仕義さる我君の仕酒宴のお
さるみもと拙しの仕出立い源い仕趣向世話ら時代へ引ぬきの後ジテ
が宝めてうん物さく〜和うんいとうとうつくろへ入道殿へるふを
のがせて狂言めされ〜梅若とうるもるけまど隅田川へと旅立れ
いうるどひめもあるすま〜班女が国のもて扇栗の下あのぎて
居れまへやと気ひくまへば二位の君へ浅ま〜やみづうらが現も
るげの挙動をうるがら咎めもあるまうずれば是ことあを恨

めりけ是ことを仕乳とてまひ仕眼もうたえさせうるるねうこがうら
がひ姿うんうけられぬうるるうれら見今かるうふ著うう〜うらいるるく
殿ようるひ〜衣紋殿のまざれ数若く中納言家成御構座る
ふをかん〜うし言ひい彼家ふ仕身をよせと世ふありうう〜受領の
馬の鞭をうるうんをがうるるやうを姿うらうが又大納言時忠
どのもいまざ侍官まづ〜れ上ふこがうらも継母仕義ふひくまれく
乳母の許ふひとを居て宿世の縁ら殿とちがうるるるる中とるるふ
つけたのみ〜乳母ふ死別をうがひふるげく二人の落合立茶あを
りのふ家を借傘徒の殿い内蔵つうらう木履板金剛の暴徒を
徒うるる甚日稚ざかるるる煙を立るつるる時殿へ氏底殿う

の家にてみづからが八坂清水六角堂いづくにもあまた水茶屋の
女ふやとそれ出よう〜我母上へ女郎まで祇園の町のもと賤女
井の水にそなたをうしてをる羽の帝の四目ふたり宮中お召れ嬢
懐胎の生く父お賜りそのうち生出れば忠盛のふとうれど実い
天子の四乱ぞう〜されども かやうのふ〜あらせ母上の昔とろくば
水あいまくれる家波女それを父四も知とおりぐ卓文ひが司馬相
如お金銭僮僕あ〜ぐ〜富貴とさびけるべ〜とのさまひ
ものさもらいどやその後後も世お出ぞるひとりも種ぐ家にてつり
報をもさらさげしっと後も一度いぐらが後る鼻備のる本殿を
きめられてるを右ちと絵号をとぐれるひるるものいふ〜も顧ぐ一家

一門官禄を極めるきふおそのやうを表せ〜まらぐさらふ上又ね
鬱蒸仏のそ〜ふも変ふかくとせぞ神四討も思れ
るつず雲をもぬぐ右嘉を四の右の薬せ〜ふ満ぐ又
うせのあらい五右丈のう〜をとぐ崩ふ八後の慢おさ〜ふ
神の四さら〜生贄の四供物の非礼を受ぬ神恵ふいぐ受ふを
るべき九生さらいるめの何ぐ命を情ぐる睫ふかる鎖繋と
ゆ男さ人死ぬを廃ひ逃〜ふゆぐるふ〜ふ〜ぐや衆うき民を活運
芸若扉その怨恨誰の効ふ報ぬ郷淵実て夏霜を降ら
疾女誣殺されて天禍をぐ〜齊の景公蓋ろう頻海の水大ふ
ゆ〜と唐の書ふ入るとや古波羅の館この屋形内裏も及ぐぬ

宮殿楼閣金〜かがしもう〜とかるもの〜べ稼ふ堂をるも勿体なく〜はしや
栄花を極めんふも又称らうる遊業牧いろわどもえごうなんうえう
てるを筆〜うとも肉眼ふいかぎうあり又雲雨の自在世界う千里隔へ
名のミ之十里のあいだ思ひ〜べ察をるところ見も亦辰君があをあやみ
らん横紙破りの隨言りのと人いかせどさぞうの放逸邪見も又え
させいるいず東盛の位階をいい信をいい仏人いををうを後の
頼政の女を召まをとうい日く〜ふつのる西石行法忠実の去い跟を始く
ありぞを諂諛の居い寇ふやうて左右を離れず怒うらもるりの為く
謗あるどるりのもをいを少〜べ〜べあまをこの人の心動けば自然こ家の孤
れとうう隙をうがふ源氏の孫氏の孫氏伯父をうがをうをうをうら

まぞいを仏門もつをせられぞ朝敵のみれ牧物を助あるをのみ
るるずあ〜召まを地ををまひう又牧政い辰君が父とて官位をも
たをめんとたびくいをるひうるへども源三位いかをうるあを辰の位入を
悦びず辰まをもあるぞち推挙せずいぶう〜いをもうをうをことふ
家の女ふ似すことをうを自分の挙動もてかくせとも自然年賤の
生質あらわれうあや〜き女とこぞうふ寵ふつげしのもあり遊
女倦倦うこぞひの氏性ようらねのをうて女子といひ臣頼政ようを
らせるふんをもうつでやをらべらをうるを家のえぞ先辰君を問ふ
押領牧政をきび〜くとひ罪ををうるべすをやうふ刑罰あるく
あつ見〜をれ牧後のあ今日ふせるをれる生物人い必とをうるるべし

死を好める神ましまさねば崇はありとも利益はあらじ況やさえ
ふる貪き時の世にさへ斯の口に昔死諫言の茶汲女の濃茶めん
御目を驚かしあられし一家一門はさらなり貴賤上下の心を安んじ万歳
ぞとうたへる平氏の繁昌動げなうらめものゝべしとこそぞつらしぬべども入
道家ちきても思ざれど美人をあさきうら、それ耳障しとねらぬへば「あさけ
なやかくまでもやせる処もおかさぬうちわざとふるへく果報のの大相国の
妻とるのそれ妹あり女ありつぎく御門にまいらせて后にあるのとき
ら花の妹 女 滋子は白河天皇の皇后 徽子は高倉天皇の中宮 重盛宗盛二人まで大臣をふれあもて二位
の位階は女のつきあぢらぬ者なれどもくその御代の極みきてはつけきて
ふつけ流れる淀は滝となり底にや沈累ぬべき身の行末をとりにし昔労
ものらきも、ぐひはあらじおりつがくきづうらはまことに果報つくるき
のの世に存命てもかひなの一諌言をいまじまうたへば暴なる死去の身
に代るならばいと聲とあるまじき長寿されば恥多し死ぬこそよ
けきとまうれごまへばおらうるさやとふりちぎり「あく伯とる酒は嫌さる
るは悪肉豹女と云下賎の狂欲に毛も厚者が物陸宅康下向は伯と
やら「悪女すむれのの猫に化「娩とえげにもよく嫁り酒宴の席へ老
婆は石遠愈さまぞうのかくるまのは介道の妻にのあそぐにしあくふくが
あん翁の陸奏にもて妻をあるに三弥本に暇の状わきてあるふと
きて及ばつき書てまふるもせんとなおより紙とり出させ青これは擅紙般
は額によせる波の海にまつがむとあらば論雜まの皇后にあらうとせ方

構ひなきはよろし件のごとしなどて出てまかりせんさくする浮気君をいやし
きものゝ行為ありのといひたるが猜むものゝそれは讒言なり彼は蓮葉ものゝ
たれ執政の所領につき若様へもつれ出てぞろく旅をなしける府下民の
面影も見別き熟白地と下情をあるもあるにおりひそりも洩らさるゝ程
家ぶらさればいやしくなれるこれを心底とりのべきろよおくろものは皆邪智にても
かくありしものゝ之たとへば源氏物語夕顔の巻なりともなるもりれた下家の
さるなる都の中かきつのねしも父と共に洪水に遊びし情世態に貫通しる
紫式部の名文もぞ卑俗のさまをあらはすとて土民の女を雅びはいえん浮気君
もまたそのとしまゝならずきものゝうへにや父の業務を継がねば親子ともに浮寡
欲薄の浮気君は賢妻の諫をもその人の嫉妬を却って不興にて心に是程なれば

はなきる為に劉これて酒宴にもおかさず必利為師渦よ呂に分抱
せらせてあきらかなり又廣女や郭劉と並べらるがそれは孝子忠臣の
究に死せるを天の神も忠ありとてひらく紀山野の黒氏一天人性
とも何やどうなるかわからんその出さへも命を惜しむといひつれどもの死なんとい
ふは薄後あるぬいひが中四角ばりてなんらへはずいひとろのそこなへ酒を
づれはせぬものぞとなまる盃基下へあげをそ「あてかあるならば」ねども
福を徇宝をおもりも中らずぞ馬耳東風花柳の浮気君をば賢妻とは似るぞ
せ身でるつて浮言の嫁尾奉郭へからをかき「花女は悪病を生すもの
乃宅廉ぢ肉のめでも何首烏の如き赤毛をそりて乾大根に似たる
角生してさもあれとにも怒り悋気嫉妬のおろかさいふも某もちかく不

遍出てたづねべし若しもさぞなれば
いかでかくあらんと思へつるれば「さて
へ二位の尼乳母のもとへ「いかく展転の
君とそれくこそ角
君ともかり軍ともなべ日ろ川をかちふそ
入道殿五ぐ〳〵戦こそへ「なりへ
なりでひとまづ帰せめへとふれ〳〵もひく〳〵
こるあそこの人丈八月ふ助けてなられ
をるふきてに臺所にそらこそ
えでめよと出こなふ入道の
撫さるふ掘平ふそろびこそ「これまでなりのごさらべ
さらへば最期ふひとるもあそれ

させてこそ千僧万僧供養せさせ
仏とおりの仏らん南無阿弥陀仏と
身を転ぜんとそこまふをえるひて
つく袖ふもすそふさりのふ
ふもそでふ仏るそらもの
君と遠ひ中女どもとあり
業報業花の日へふの生
に因報ド四蓋さるの四
みあぶるいとひきりどもを入道殿女どもうちもをかけれ
ふりよせて胸をさそりのろ

殷紂正妃を
其至下ふ殯せ
一話正史ふ
載せば
いそんや
正朽國ふ
ありてなや

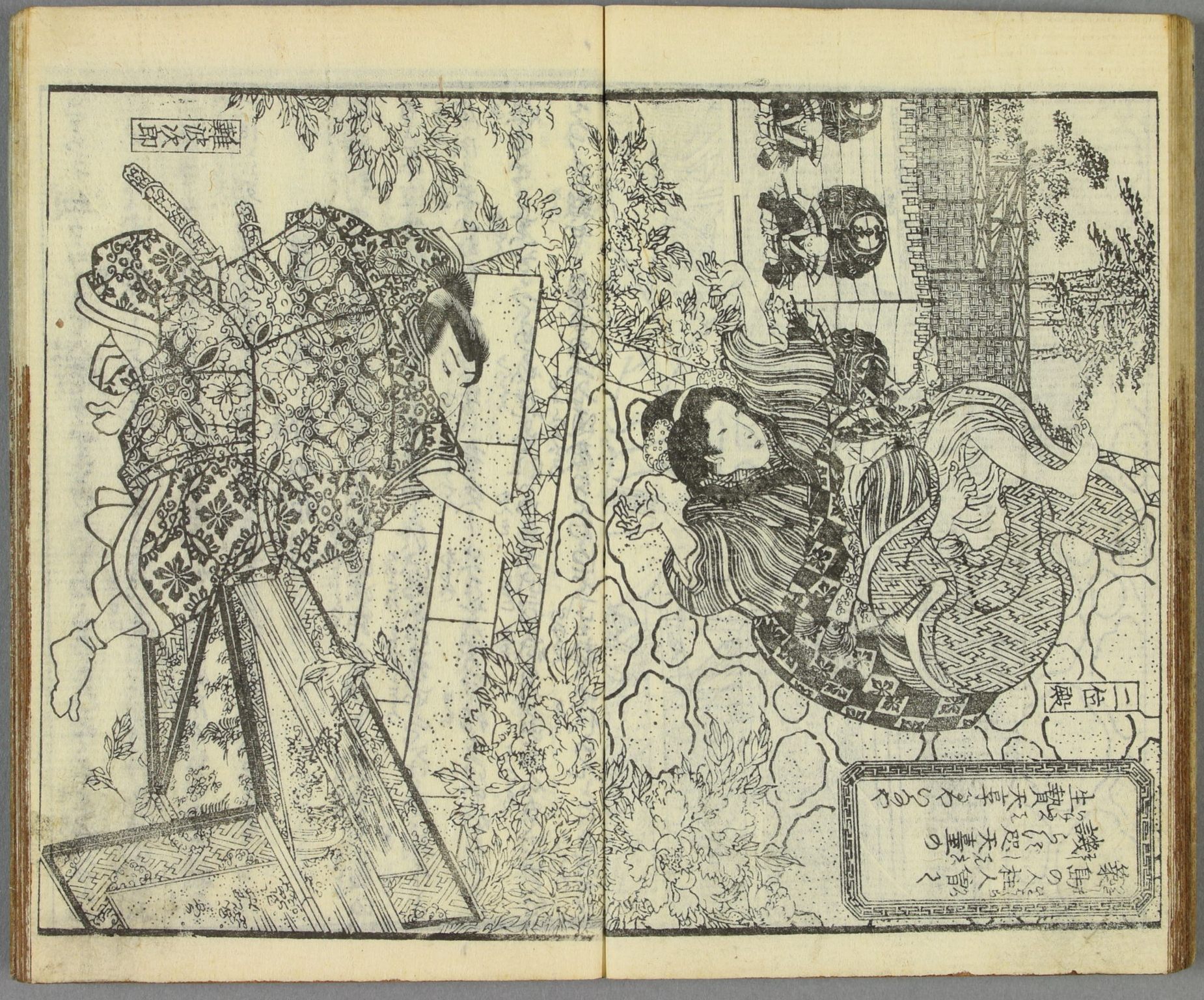
佛御前

妹尾太郎

松中納言

祇王

入道殿



さらに助らんとて入道ぐるまをひかせ給へども未練なるらん
いざり〳〵ちからが頑〳〵とまんとあまりこの行妻をうたのけのけは墓石
の弱腰をたらうてやつきゆりくるべかりしの屏風うちこぼれ燭干
一間に裂けて五畳敷めりともに逆さまにぞおちこまるる

第七回　都の布引

既時刻もいくらぬと夜後つくろひ鎧直し墓の
もとに近付けるゞ遅うず遠かりぬ引ぬかれ墓石ぐけこう燭干と
屏風と共に打ちのべ絶房い驚き〳〵大きをひろげ待るけをかりくと
懐きさり茶をふくめ水抱出しかれ白ふ三の底もつぎたれんもてじくて
さうして殺せとのきぬに入道殿いかに白て生勢ふ代らんとに老婆ゞ
情ゆ用捨いらぬ究〳〵押えあ百姓ゆるゝ〳〵ふをと作らるを見ぞ
絶房かりとまりてなりをせ告知を後縄解けば数百の人まの番所
を作りとぐこと墓のうこをも一汎〳〵あらありゞこうらぬくふ代らせかの
い神仏ひ墓石と現まて命を救ひ〳〵ふをとをさうとてあきう
力作のいそらかをいとこらぐみかくらかふ〳〵きゞ〳〵絶を出ぐ
る後を野山〳〵ゆるふ異なくずゞ時者民系武士民らとのうとるふ
かりるさ図こ五のどう懐中まくる強力のねくみを合せ物陰ふ使宜を
うかりふ服ぞ〳〵絶房そうぐ〳〵つんのけるをどもらば新〳〵ひ世盗ふむ
うひ小言ふ仏のうさやく程ふ陰陽師いこ五のどく物事を行
ひ更花を抱〳〵と逃げの絶房ひ墓の仏をとひき究ふのどをとあるをうき

「誠ハまことハ某も御覚悟の上ハ力なし御最後潔くあらせられんと
穴の中へいざれ給ひし座させ参らせ某も共に蓮台の處へハあなのめぐりに立
寄りめぐりし人どもハ念佛となへつゝ栗石をなげいれまつくしなをのふみ
穴を埋み塚となし経房とのへ言上せしかバ入道殿ハ其趣をきゝ「でかしたり
難波次郎とやらん此度の賞ニそ叢卒が筆せし石切一擲役につかはさる
と女童ふめやるせなるみる力を難波に賜ひる六経房ハ押載き「ありがた
悪源太が石切とありがたくもけゞやめいるなをかりひ出しハ私磨え年
西門の栴の若木の黄武者我年にいしも二むかしなる補しる
此石切ハ今日より今稀にとなるひつるか人に作まてる屏風なし立
欄干の彫物をあてもつかくるかかる屏風ハ院出の名所の畫いづく
よせて仇をむくゆる其わりさゝなとつまびらかに死を急ぎ彼が
念き怨魂をもて和めんとの心自殺江馬にて棄べき命をまうけ
しうるハ家々の不忠なれども存命ぐるしく後年知らせんとおもひ
嗟このうへハ墓所の御遺言をいれさせなひし此後ある墓前るとも身
人を苦しめきしまへぞかくてきてあきさるへく生ある死後の愚君が我ひ
ひとのかはとのひとそりて下人をよびかしこの檜頭みあそよそひそとる
人丈ありさくつれ来れとなをきゝさればより武者へこゝろをも何ひ難波が自
殺ふ勇氣らをけるる心に満をかよわしけるかの手我をよひ仇る残
するゆゑあらんともかくも仇にちうよる時節ハ来るべき儀もあるまじくとも心を励
ますしゆげあくひられいづきハ難波へかくへおちつづけ悪「つらむきこしめきる

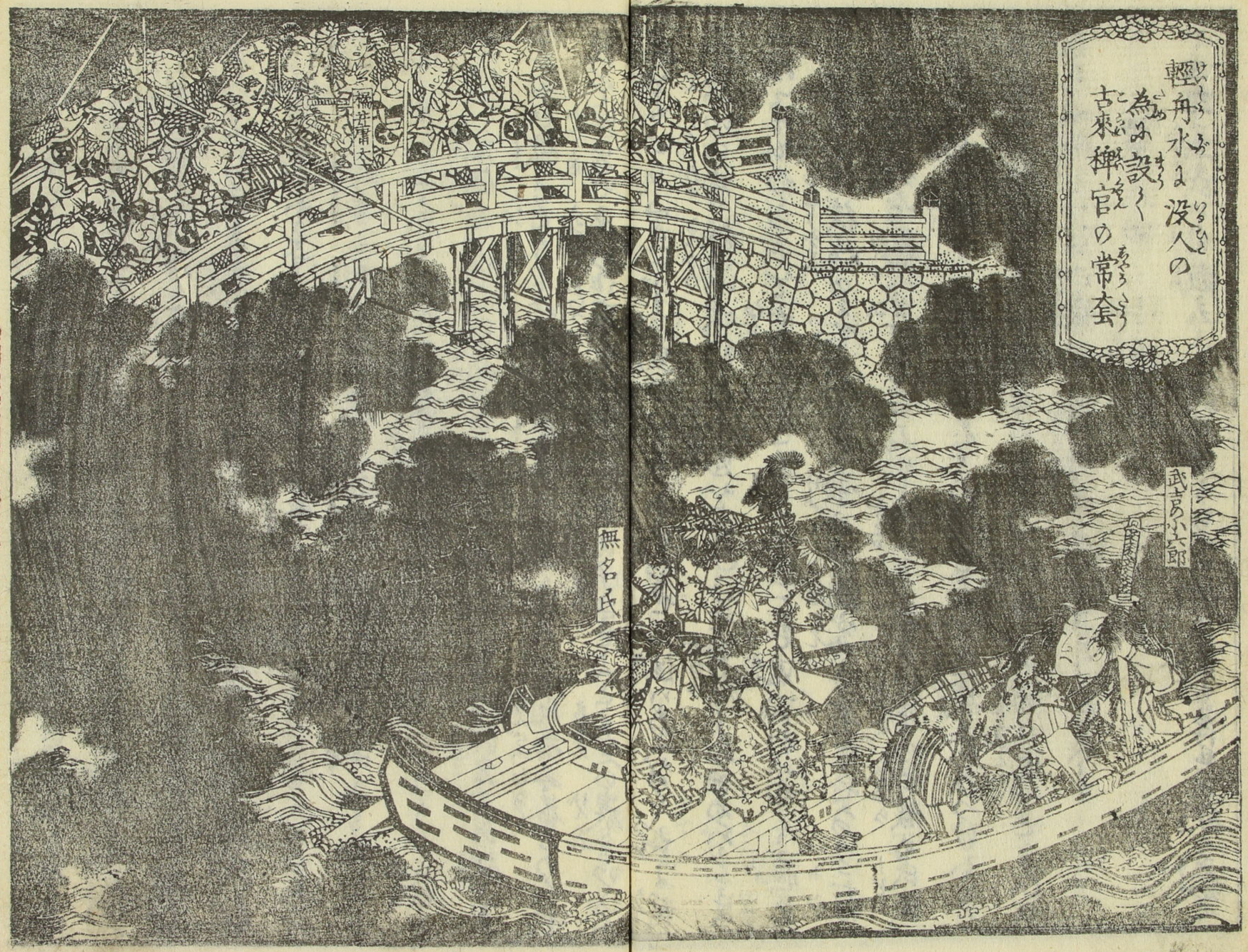
義わる武士なるかとくみられを欲ときとうさいをひとり下人ふかろう色首をき
らを出ふ紀念の品をかを返して去らしもるをろらひそ世よ奇特なるはど
ふ易事の去力打組うち力戦しとかるを嬉しさいろるらん強彼い読よ
乱入せんとぐ胸中の機を察し自害しと我ろを成ぬきを世事
を計るを主人の忠我ろを為るを義をおもつを今猿藉よ及びを彼ぐ
忠をむうしして義い不義の人とのをを一旦ろを遂ぞくともを人
とをられし我れ又近付も易うるべしと心をさをめ強彼よもう
ひを主従とうり然歌とうるもを前世の業因うを命ろうをを主れ
首打来らをるををうち然歌かををのふをうを色をしいを心ふ鎖つる
ものらん武士ろりしるりしうを主の首をきうをくを源ろを志門のをうり

のんどにあてつゝくとつらぬきすてゝ手にもちし西に對ひて合掌し
しバ武者はさすがに切るにもつかずなにとせんと妹尾太郎は死骸を埋て
とひとけるは不忠といひて切腹めさるゝ難波氏はさぞかしげに義平が
死去の上ぎ死生といひ下人までもなく果てぬる侯脇者にそれ代つて介
錯せんと柄に手をかけ後方にまはりしが武者はつきのけ太刀ふりあげ
「おのれはきらいでよそのものにかゝれ」とかゞりしやゝうしてまへとひらめか
す刃の光とまろともに首は前にておちたりける武者は首をとりあげて
死骸の小袖のそで引さきて腰にまろとひつけ石切の太刀うちかたげ
眼中に立たる妹尾は武者に目をつけぬしが入道ときてや合下人
とよびて下知をつゝ再墓へ御供申御酒盛もてむきても入道どの
盃をもとり上まげず一旦のいかりにまかせ二位はあへなく討たれ
み勲功の有難波次郎は不忠をいひて自殺しぬさもあるべしと思
らぬるものあらうと空しくころしゝことを思へばかはゆく痛ま
しけれと御後悔の色みえて今日の酒宴も是までなり二位
の葬式は例を勘へ日をえらみて行なしめよ綾房の亡骸も氏族
にあたへ柩を轉ておんどろにとりもたせよと宅康にいひつけおき
寝殿にかへらせたまひ辰君はかまへて引導して佛前にとよひ
召まぬ佛とはいへど御喪中の御継郎のおなさけかるべし

第八回　小枝櫓

小六郎景武は自殺せる仇の首うちては何の業もおそきと歎きみるにて

輕舟水よ没人の為め設く
古來稀官の常套



つゐに戮し首をさらせし故主の太刀返しこゝろる難波の義心は感じて
ものあるをおさへいざやまろて主君の亡骸に経房の首をむくせ石切は
寺へ寄附し作者の布施にあてられ其後そのまゝより腰に帯し再清
盛父子にちかづき恨みをすゝがんとす又は松浦重俊に出会では残念
なり勇氣をかくさず所にあらずと裏門を出で南をさしておもんとするをば
物陰より許多の捕手あらはれ出家武と中にとりこめ中々ゆるさじと
あれゆきが「手ずだましのの木槌武者おのれぬく主のかさうや除る
ここに悪源太がけらいなめものなるらん難波次郎の経房のの敵とあれ
まてその敵に首をさらせて此手のよふ者ありて不問答無益のくらせ
ものを逃さで平の家をうかゞふ奴原白状させよと主人の厳命かくらいへ
ありと蜘をひるがへし逆巻水へとびつる勇者をさんぐあ雑兵等は
のらくよて勢きたる打かりけをせば捕へんとせ河にそめていひ
つけ過り水練に熟したらば底を泳ぎて逃られん皆悉入て死骸をさ
がせどやかくいきまけど捕子ぎは利あんあそせ浅き深きも不案内
かゝる家や泥亀なるとやせん況不案内まず褌ら高ありのが上
痺きかしてつゞやけば「まてしくよわい奴原我人ねふあらざりせば千
尋の底も茶の子なれど士卒をかいてわ軍から裸になりては武威おち
し敵兵にあなどらもん汝にかゝるとかさてひとさ「のかく下い上次第お迫
らうら「のうらいふらとあらそをるうちに俄にむくし黒雲忽水上にうち
出すよくひまに一面に満西岸の人家をうけつらなるの闇にまきり

ちぐちの新ぐるまもたゝらにてえぞざる程なれどこれそもうかとおぢ
おそれをあぐ〜いなのものえぎうけをかくいと晴きそのほふいさるか
雲の月ありて清きなる小男の垂髪をちらしる藏拍の水干
きて黄金造のたかえきたるが彼武者て紙のまとなのまとの鎧を
何ト〜とぐ如くみとださるをよようえつけて見ふをおじめれくなをる
めのありて武者はえめげ引ぐや追やくと反ふさるびあ岸ふりる
ちて頻みさうぐがさうぐやど雲うさるうく紙うえ武るぐひの
紙ぐふ分ぐをへ俄ゆ世界い滅もるれあうかるやとんをまどう〜あて
て弁をあをえぐ〜ゆる溺ゆるの高く声をかぎてふさけぐのを活るとて
ちいかうけるがゆうくふ雲えれ引て潜み〜紙のあと考ら波ちてえぬる

あい姉屋敷の江戸ようの花井庸ちぐ〜武て世ふも如〜まぬ兵かく〜
いふ声ふもおぢよう源氏の殊蒙ふんのあ〜〜為常ふ縄かまとのいまに
景武とがけ新「ニハけ〜うらぬ江疑ひ疑はぐ〜のぐ行のりどふ血逆ふれうと
て現生の歌ゆふ錯さをもせ〜いづくまでも我名い水撫名い武者で
も武道いふ知ぐ〜ゆんぐ和うしてとのとりり弱ニちくとも更ぐらんとぐれさ
声ふるりどおぢて胸いをぐろの古拍子ちちひづう〜をあぐをせををとと
い通〜あをと巻ふぐち組子を実のけもうんとを見べ〜いどぐうをる
大臈りのいよ〜りうくゆるさをぬりのふいえせぐ搦めとれう〜
ニせうくをと但ようかふぐち振上うちかるゆ今ふけれが色
迷もふのをとうれば掴んぐるのをろるげ組むをひ行ぐうくりんぐう

うるはしき左右より一度おひらめく十手剣を抜きて中おとうちあひ
ゆつゝとあゝ立ちいでる大のみらん稽書水の月とうあらられかゝとふ
かゝれあまたの兵つらにつゝひるむを結ぶとみ出るとのぐさ〳〵やらゞ〳〵と
遍行組子者景武石切ひらやとぬきあ拓こゝ敷をこのぞず
或いとうひ或いまをとる翔の里まぐ義延けるゞおのまいるこゝ渡き
こゝう歌い荒手の加ろうときれどもつけどもひるまぞとたゝ毎は
手鮮の強さたとそろ〳〵法いてかゝるを拂ふべきあもなまう
たゞむきたのこゝ〳〵所も手い屑つのゞうかゝもあらぞこと加義
川の流ありてみる小枝橋おひつあらられ欄干は跳まるゞう歌一二人
きう例〳〵とのいる其ひまに人まかゝう死ゆしもらたゞ〳〵芸近

ゆめどもたのかひ更ふあしふぞもむのゝ拓ふ立場りぬ妹尾太郎いかく
ときて歌ふ助るりのあゝそ具幻郷を拓ふとゞりも安かゝぬゆゝとふゞび
吾をさゝ向け遠を夢くさゞるさもゞ二人の拓〳〵更よ赤ゝまず折紙波
拓意がられい君を作る大衆人と死ふ除いひゝをらふとゞるゞ法を贅案
の背紙の殺情ゝ立ゝゞあよう完を拙ゝき底ゝうつゞけて案墻ふ
そ人つ大樹の根まぞぬけあるゞ拙そ人あきを由らゞふあゝまる若ゝを
つゝ件の宛ようゞ出ゝ命を助けゝとかまゝ人ゝる放ゝゝまを実ハ義事なれ
ども君の目を探るハ石忠ゝう又景武をゝ人ゝるれるハ父六郎ふいと
よく似ゝく血色のあゝきゝ人夫の中ふひゝう殺事を含ゝゝれ彼ゞゞ
ゝ分ゝ〳〵のゝ世ゝのゝとゞゝ遥冥の義平賑前の系武忠後ふ迫るい

齡と延しと菊花
葉ゑ置
露の玉
勝間は
女並人の
毒とも知らん
佛御前
辰君

運命のきはまりとなくへ孔をいとゞ且は君と衆と謝し且は歌のいろをか
ごめ命をたゝて毎年とゝろやゝへ忠をもて義をいとのべ〜かをたゝへ
ひ墓所もつくりたる命うゝらてゆけ完よう遠生きまひるをぐうきてし
姫淵の下人かゝられて鉦とゆぐやゞて内裏にたのび奉り御息女の皇后を
后宮の封田まゝ〜けの始末を語らせたまへ太皇后も又入道どの北
ひゝゞる仏を敬ふをとゝ二位殿と殿内深くかくまひ奈せて五ようゝむ
ゐゝりるゝらひ奉武もわゝざるわどの墓は稚世のまゝ〜ますと入
道殿にたらせ〜ゐて後ゐ平たらせてゐりんと姫淵ひゝゝもひゝゝる
らんとゝてめてあり合せゐ人は悔のそゝみ
まべかゝりゝ嫌〜とあり〜けり又墓をも六丈をりく築とゆ上ふ
金殿玉楼を建延尺墓とゆりゝる扁額をかゝげ遊宴の所と
せゝをてゝゝり

第九回　嵯峨野上

風ふき雲ゆる新緑まゝ日盛り炎暑をいとゝ雲と凌ぐ桂棟ゆゝ月
の清さふ白露ゝと鏡ふ水無月より長月の上旬ゝ迎春
て豆腐あをびゝ多ひゝもゝ〜ゝ秋の夜ゝ月ゝ時をさゞめ
ゐく村ゆ目ゆる次ゝ六波羅ふゝゝ〜ゝ程ゝひゝさゝゝゝゝ
奇物を好ゝをゝゝゝひゝまゝ日本国中ゝゝゝゝ及ぶ宮廉
漢土ゆも見聞せゐ名ゆ無名木猪國ゝ住ゝゝ日ゝゝ百を
ゝて年ゝ中ゆも伽陵頻迦の雄ゆ孔の白さ鳥ゝ戸の程く

にはせめ駅路西王母が手種の桃花宮の湯殿植樹和漢
をる松竹日月の幕花これらおいて山海経
十洲記などにも載さる珍物名状しがたしなり今も
麒麟を西の方に生ずるなり相承の風聞は某とこれをとも
殊尾なんどは遠後す相承いさきさらずいつぞやの山陰外に佛の
腹のふくべとてすりたるらぬ其外のよろこび風見孫とも
称せべきにやせんといさをあるべし祇王もいるなるべしあるいは
情をとりけむなるべしわどの方とのりてゆ六月より及びけり入道どの
きこしめしてまいらすべき男子三人女子五人をまうけぬ兄を盛世
と称し現存せるりの十人なりけり三人を安産せさせべ大福者者

と人のうちゆむ十二人の子寶のもちのうさそうなく産よかし相ふた
ひとり家よりぬのとてうりとりふけられば能公は祇王を後
孫の山荘へいもうと妓女ともふうつさせてまひぬ辰君は昼夜に傍
たるさ侍をどと今ふたらまるべるるべるの師匠ア呂の稚
ぶふやどさへ入道殿の呂ふとうて一除威権をとるべきふかまべく
ふいりぬれと祇王もあれ佛ふもあるいるをとらまべかのづら
いきをひつろべいあるまべきを妨るべべくやあると師匠ア呂と
密に談合し悪事を施す時節をまべ甘露の日よりも
ありけり御佛の推参せし祇王は程なく棄られまるらせ
もと出るも持るも門ど野辺のまいづまろ杖あそべ果べき

人心の秋の嵯峨野ふ人心の差峨くるを怨む
祇女
祇王
母刀自

と書置てこち出〜と佛いとうみて感ふこずず入道殿ふるげきけさ
べげふるあそれとかり〜り〜再祇王も召返され若ふ寵遇厚かり
けるど祇王い廿歳をや〜超こり佛ハ二八の盛なれどこの〜びも佛
をび程あそれみて〜ハ戯ふとあてなきたまへども祇王い恨みず
さもあるべきすえと明らあ〜ども北嵯峨のさび〜き秋の野
道のさゆうんをど真袖い露ふ落ちもあ見ぬるきに
ちのわど佛い初冬の夜をよ中られ一二日変義こりとりの
うふきく常の祝のそれのちい一夜も物を賜らぬ佛くありーと
うらみやせんとそうまれ拘数〜個じ歌義ふをきあうろひ
る八重菊の作り枝ふつけく佛のりえつろ〜けり佛いすど

園をうもをといひく夜君ゞ来ることたるうりとい来るさずともあた
らるこりかく〜あ人ふ墮胎せさせて然をも結ばせつをどひとう〜く
さよう〜前いどうべ〜こびつゞをふ福ふるる友かく〜と佛ふいひえられ
てこいのひうけふはやつうまん捨かれどと思事をめぐら〜入道さの北
門傷1今雪も即てありけるゞ熟睡の間をすち長義をとどり出
廊下つこひふ佛の局一西うんとる時泉水の岩の間とりぬきあ〜さ〜
あ〜とあ〜えようる女の姿りーや祇王ゞ佛のりえうらみをいそんと来る
ふあらばやさらべ引よせ刺殺〜深夜ふふ屋一ちのひ入眠いひうろ
をびあと服ゆめだ さてとよかく〜と妻戸を折戒弟をかく〜く
待あて

四編より代王佛出家遁世ふたゝびさう蠱盆地獄ふ住つく
松虫鈴虫憂目をうる物語法然上人の流罪周文王ふ頼朝を
あゝ伯邑考を肉醢ふすといふ件の面影を女ふ換へく袖萩ゲ
祭文の段と罕破の景清を混合せくる作者の苦心草稿
既ふ半ふ曁べり引つゞきく發兌すべ〜預高評をぬくと
ゆきぞ

繡像一陽齋豐國筆

浄書　整軒玄魚
彫工　江川仙太郎

發行　肅林

大坂

出雲寺萬次郎　須原屋茂兵衛　山城屋佐兵衛　小林新兵衛　須原屋伊八　大助
綿屋喜兵衛　河内屋太兵衛　泉屋市兵衛　岡田屋嘉七　柳原屋清兵衛　河内屋藤兵衛